

北海道芦別高等学校

課 程 全 日 制
学 科 普 通 科
生徒数 339名

1 取組の特徴

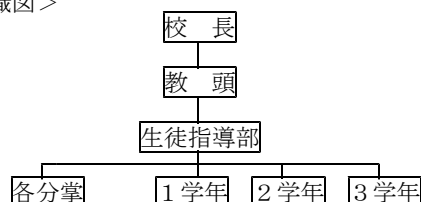
構成的グループエンカウンター等を通して、自己理解・他者理解を深め、自己変容・自己成長を図るとともに、他者との間で思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育む。

2 取組のねらい

円滑な人間関係を構築する力を育成し、そのことにより自己理解の深化や自己改善の手法を習得することを目指す。

また、教員の子防的・開発的な生徒指導及び教育相談スキルの向上を目指す。

<組織図>



3 取組の経過

- | | | | |
|----|--|-----|---|
| 4月 | ・ 宿泊研修において構成的グループエンカウンターの実施 | 10月 | ・ 望ましいコミュニケーションについて考える取組②
(1年生全体及びHRごとに実施) |
| 8月 | ・ 校内研修会 (トレーニングの実施に向けた教員研修) 本校スクールカウンセラーによる講演・演習 | 11月 | ・ 望ましいコミュニケーションについて考える取組③
(1年生各HRごとに実施) |
| 9月 | ・ 望ましいコミュニケーションについて考える取組①
(1年生全体を対象に実施) | 12月 | ・ 「ほっと」の実施 |
| | | 2月 | ・ 校内研修会 (年間のまとめ) |

4 取組の内容

1 集合ゲーム (非言語によるコミュニケーション)

- (1) ねらい コミュニケーションの手段について理解を深め、望ましいコミュニケーションについて考える。
- (2) 対 象 1年生
- (3) 内 容 言葉を用いずに指定された人数でグループを作るゲーム
- (4) 成 果 (生徒の感想)
 - ・ 当たり前話していることがコミュニケーションで最も重要だと感じた。
 - ・ 伝えるには目で見ることも大事だということに気付いた。



集合ゲームの様子

4 取組の内容

2 伝言ゲーム

- (1) ねらい 情報伝達におけるコミュニケーションの在り方について理解を深め、望ましいコミュニケーションについて考える。
- (2) 対象 1年生
- (3) 内容 グループに分かれて伝言ゲームを行い、各グループの情報伝達の方法を比較することで、コミュニケーションの工夫を図る。
- (4) 成果 (生徒の感想)
 - ・人の話をしっかり聞くことの大切さを感じた。
 - ・あやふやなまま伝えないように気を付けようと思った。
 - ・言葉は人を傷つけてしまうことがあると感じた。



伝言ゲームの様子

3 ほめほめゲーム

- (1) ねらい 相手の良さを見つけて伝えることを通して、望ましいコミュニケーションについて考える。
- (2) 対象 1年生
- (3) 内容 グループに分かれ、それぞれの長所について指摘し合うゲーム
- (4) 成果 (生徒の感想)
 - ・ほめられると恥ずかしいけれど嬉しい気持ちになった。
 - ・感謝を伝えると相手も自分もいい気持ちになる。
 - ・人の良いところを思いついたが書くのに躊躇した。



ほめほめゲームの様子

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
本年度1年生では、中途退学者数0人、不登校生徒数0人であった。
- (2) その他の指標による評価
ボランティア活動の参加者数が増加した。
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」実施による生徒のコミュニケーションスキルの概況
「ほっと」の分析結果から、本年度の1年生は、自己表現よりも他者配慮が弱い傾向がうかがえた。学校生活においても、活発に自分の気持ちを表現できる一方で、相手への配慮を言葉にできていないことが原因で人間関係におけるトラブルが生じやすい傾向が見られる。
- (4) 生徒の変容した姿
友人関係の幅に広がりが見られるとともに、対人トラブルが以前より減少した。また、台湾の高校生を本校に迎えた際、積極的にコミュニケーションを図る姿が見られ、取組の成果が発揮された。

2 課題

- (1) 他者への配慮や他者と助け合ったり支え合ったりする態度の育成。
- (2) 集団維持に関連するスキルの向上。

3 次年度に向けて

- (1) 全校的な取組に発展させる。特に、1、2年生においては、年度当初に重点的に取組を実施する。
- (2) 「ほっと」の分析結果を、学年やHR経営に生かすとともに、個人面談等においても活用する。

北海道札幌北高等学校

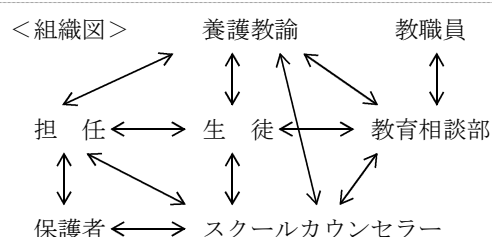
課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 961名

1 取組の特徴

- (1) スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの実施
- (2) スクールカウンセラーを活用した講演会・校内研修の実施

2 取組のねらい

友人関係をはじめとした人間関係の形成や、学習に関連して自己に対する悩みを抱える生徒への支援を充実させるため、特別な支援を必要としている生徒への組織的校内支援体制を検討・整備するため。



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 4～5月 仲間づくり、宿泊研修 4～3月 SC個別カウンセリング
教員へのコンサルテーション 4月 オリエンテーション及びPTA総会にて
スクールカウンセラーに関する広報活動 4月 スクールカウンセラーたより発行 4月 意識調査及びMG検査実施 6月 意識調査及びMG検査分析 | <ul style="list-style-type: none"> 7月 学校祭による集団行事への取組 7月 生徒理解のための会議 10月 PTAと教職員講演会
(講師スクールカウンセラー) 11月 意識調査、分析 12月 生徒理解のための会議 2月 校内研修会
(スクールカウンセラーを交えた) |
|---|---|

4 取組の内容

スクールカウンセラーによる生徒へのカウンセリングは2月までに106件行われた。カウンセリング件数の内訳は、4月～2日5件、5月～2日10件、6月～3日8件、7月～2日8件、8月～1日4件、9月～3日12件、10月～4日21件、11月～3日15件、12月～3日16件、1月～2日7件、2月～3日、3月～2日であった。

生徒は、スクールカウンセラーに自分自身の悩みなどを打ち明けることにより、学校生活から生じる精神的重圧や負担を軽くすることができた。また、カウンセリングの内容は、教育相談部を通じて、学級担任と養護教諭に共有され、生徒一人一人の学校生活への支援に役立てることができた。

スクールカウンセラーを講師とする講演会では、『多様な背景を抱える高校生の歩みから考えたこと～「保護者」「教師」がささやかに子どもを支えていくために～』と題する講演をいただき、教育相談を必要とする生徒の背景、本校生徒の特徴、支援のための手段等につ

いて研修を深めた。また、本校生徒のカウンセ
 ングの事例について解説があり、生徒との具体な関
 わり方についても示唆を頂いた。苦悩する生徒と
 関わりを持つ教師は、日々、暗中模索の感が否め
 ない。しかし、校内研修をとおして、生徒理解が
 深まることにより、今後の生徒との関わりに道筋
 が見えてくるとともに、教職員全体に協力体制の
 意識も強められた。

本校は進学校であり、心理的な不定さが学業に
 起因している生徒も多い。このような生徒は、コ
 ミュニケーションを通して友人や教師に悩みを打
 ち明けたり、思考を整理しながら言いたいことは
 きちんと伝え、アドバイスを受けることが必要と
 考えている。そこで、本校では、授業の中にアク
 ティブラーニングを取り入れることにより、コ
 ミュニケーションスキルの育成を図る取組を行っ
 ている。小グループごとに課題を設定し、グルー
 プ内で議論しながら問題演習に取り組み、その後、
 代表生徒が全体の前で説明を行う工夫をしている。まだ一部教科の取組だが、コミュニケー
 ションスキル向上の効果について検証したい。



スクールカウンセラーによる講演会の様子



アクティブラーニングと取り入れた授業の様子

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
 中途退学者数は2名増加し、不登校生徒数は7人減少した。
- (2) その他の指標による評価
 生徒一人当たりの欠席日数は0.2日分減少した。
- (3) 意識調査の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
 学校行事、授業等での集団的コミュニケーションスキル向上の取組により、集団の中
 での自分の役割や目標を見いだし、高校入学後、自己有用感のない生徒は、ゆるやかに
 減少しており、それらの効果が現れているように思われる。(エ参照)
- (4) 生徒の変容した姿(2学年意識調査の結果)

H26 2学年意識調査	1年1回	1年2回	2年1回	2年2回
一人ですることが心配	63.8%	56.6%	55.0%	53.8%
自分は役に立たない	33.9%	29.2%	30.4%	26.6%
自分がみじめと感じる	24.5%	23.3%	22.3%	20.8%

自分にマイナスのイメージ
 を持つ生徒は学年を追うご
 とに減少している。

2 課題

- (1) 学業不調等で不安を持つ生徒、発達障害生徒に対する心のケア、自己マネジメント能力
 の育成について、方針をどのように打ち立てていくか。
- (2) その方針実現のため、スクールカウンセラーを交えた組織体としての機能をいかに高め
 ていくか。

3 次年度に向けて

学業に関する悩みを持っている生徒が多い。それに付随し登校・進路等に不安を感じたり、
 情緒の不安定、心身の不調、対人・家族関係等に悩みを持つ生徒もいる。学校の特質上、教
 育相談対象生徒は将来的にもなくなることが予想される。そのため今後もスクールカウ
 ンセラーを活用しながら、組織として有効な対策を立て支援を行い、さらに検証を進めてい
 く必要がある。

4 取組の内容

2 校内研修

- (1) 実施日 平成26年7月24日（木）
- (2) 講師 北海道教育委員会教育委員
鶴羽佳子氏
- (3) 内容 教職員と保護者の参加のもと、「ことばの力」と題して、効果的に内容を伝える話し方について研修会を開催し、コミュニケーションの取り方について研修を行った。



東区地域子ども夏祭りの様子

3 さっぽろ雪まつりボランティア

- (1) 実施日 平成27年2月8日（日）
- (2) 内容 有志の生徒35名が、「さっぽろ雪まつりつどーむ会場」にて、竹スキー滑り台、輪投げ、バンブーダンスなどの催し物において会場スタッフとしてボランティア活動を行った。生徒は、会場に来場した市民の方々と交流を図った。



さっぽろ雪まつりボランティアの様子

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
 - ・不登校生徒数及び中途退学者は、全ての学年において減少したが、特に、1年生の中途退学者が大きく減少した。
- (2) その他の指標による評価
 - ・保健室年間相談者数が全ての学年において減少し、ボランティア活動等体験活動の参加者人数（延べ人数）が増加した。

2 子ども理解支援ツール「ほっと」の結果

10月に1年生8クラス（全クラス）、2年生と3年生2クラスを抽出して実施した。

- (1) 男子は全学年全クラスで「称賛」と「遵守」が低く、「拒否」が高いという同様な傾向が見られた。また、「4因子」の得点傾向は「自己統制」が低い傾向が見られた。
- (2) 女子は全学年全クラスで「忠告」と「拒否」が低く、「緊張」が高い傾向が見られた。また、「4因子」の得点傾向は「自己統制」が低く、「関係維持」が高い傾向が見られた。

3 課題

- (1) スクールカウンセラーを活用した教育相談の更なる充実が来年度の課題である。
- (2) 各種検査をさらに活用し個別の支援計画を適宜作成する。

4 次年度に向けて

- (1) 定期的なスクールカウンセラーによる教育相談の実施を図る。
- (2) 生徒主体による地域への様々な活動を、より一層促進し、自己肯定感を持たせるように計画する。

北海道札幌琴似工業高等学校

課程 全日制
 学科 工業科
 生徒数 918名

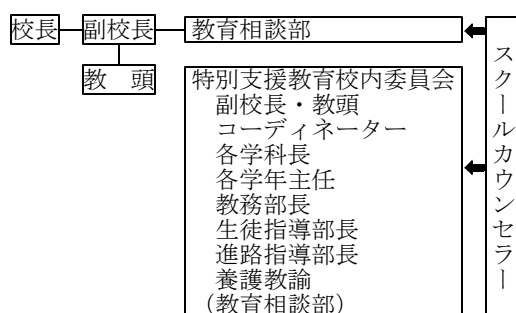
1 取組の特徴

予防的・開発的教育相談を通して、日常の学校生活はもちろん進路実現や社会生活において必要不可欠なコミュニケーション能力のスキルアップを図る。

2 取組のねらい

- ・ 集団カウンセリング及び体験的な活動を通してコミュニケーション能力の育成。
- ・ 生徒のコミュニケーション能力の育成を推進するための教職員研修の充実。

<組織図>



3 取組の経過

- ※ 個人面談は通年（不定期）で実施
- | | |
|---|--|
| 4月 アセスメントに関する教職員研修
対象：1 学年学級担任
内容：アセスメントの種類や目的、
データの読み取り方、利用方法
について
アセス（1回目）実施 | 5月 アセス（1回目）結果のシェアリング
6月 校内研修会
12月 アセス（2回目）実施
ものづくり工作教室
1月 アセス（2回目）結果のシェアリング
宿泊研修
2月 今年度の反省 |
|---|--|

4 取組の内容

1 学級環境適応感尺度「アセス」の結果

昨年度より実施している学級環境適応感尺度「アセス」を、今年度も1、2 学年を対象に年2回実施した。1、2 学年とも各領域のバランスはとれており、概ね良好な様子であった。

- (1) 2つの学年とも「友人サポート」の値が他領域よりも低いことから、困っている相手を助けたり、誰かに助けを求めたりすることが得意ではない傾向が見られる。
- (2) 1年生において、入学して日が経つにつれ、「学習的適応」が低くなっていることから、学習支援が必要な生徒が多いと思われる。

	1 学年		2 学年	
	第1回	第2回	第1回	第2回
生活満足感	54.6	53.3	54.4	54.5
教師サポート	56.5	54.9	58.3	57.8
友人サポート	51.0	48.8	52.1	51.9
向社会的スキル	53.3	52.0	56.8	56.1
非侵害的關係	58.5	54.6	54.1	56.1
学習的適応	55.1	54.5	53.5	54.1

アセスの各学年平均値

4 取組の内容

2 校内研修会

- (1) 実施日 平成26年6月17日（火）
- (2) 講師 さっぽろCBT counseling space ころsofa 太田 滋 春 氏
- (3) 内容 「事例から考えるチームアプローチのコツ」と題して、スクールカウンセラーが学校と取り組んだ相談事例を紹介してもらった。学校の中の連携として、学年間で問題の共有化と役割分担、学校ができることを積極的に実行に移すことなどチームアプローチのスタンスで対応することの必要性を確認することができた。



校内研修会の様子

3 ものづくり工作教室

- (1) 実施日 平成26年11月29日（土）
- (2) 内容 「金属アートコレクションおりづる工作」と題して、生徒が、参加希望のあった小学5年生と小学6年生を相手に、銅板から折り鶴の作り方を説明した。生徒は、人に説明し、伝えることの難しさを体験することができた。



ものづくり工作教室の様子

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
中途退学者数及び不登校生徒数の総数に大きな変化はなかったが、1年生の中途退学者数が増加した。
- (2) その他の指標による評価
ア 保健室の年間利用者数及び年間相談者数が減少した。
イ 生徒一人当たりの欠席日数は、2年生は減少したものの1年生と3年生が増加した。
- (3) その他
ア 昨年度のコミュニケーションスキルアップ教室が、今年度の個別面談につながった例があった。集団カウンセリングはもちろんのこと、スクールカウンセラーとの顔合わせ、人柄を知ってもらう機会として、スキルアップ教室は有効であると感じた。
イ アセスメントの結果を教員間で共有する機会を増やすことで、連携して生徒を指導することが出来た。

2 課題

- (1) スクールカウンセラーとの連携のもと、継続して集団カウンセリングを行うこと。
- (2) 教育相談業務に対する教員間の理解を得ること。

3 次年度に向けて

- (1) アセスメント及び集団カウンセリングを年間計画に位置付け実施する。
- (2) 教職員に対する研修と啓蒙活動等を継続し、全職員の協力のもと生徒への支援を実施する。

北海道野幌高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 784名

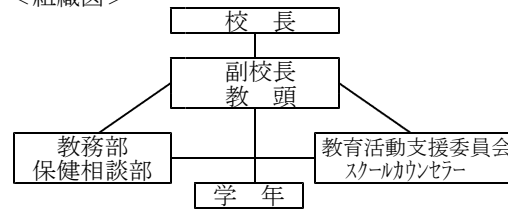
1 取組の特徴

生徒のコミュニケーション能力育成のためのコミュニケーションスキルトレーニングを計画的に実施するとともに、カウンセリングを通じて生徒個々の学校生活の適応能力を向上させる。

2 取組のねらい

基本的な生活習慣や人間関係づくりの能力等、社会適応力が十分身に付いていない生徒に対し、スクールカウンセラーと連携し、教育相談や人間関係構築の方法等の学習・体験の機会を設け、学校目標にある自立した生徒の育成を目指す。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|--|
| <p>4月 スクールカウンセラーとカウンセリング内容の協議、生徒及び保護者へのカウンセリング</p> <p>5月 生徒及び保護者へのカウンセリング</p> <p>6月 生徒へのカウンセリング</p> <p>7月 薬物乱用防止教室
生徒へのカウンセリング
教育活動支援に関する講演会</p> <p>8月 生徒及び保護者へのカウンセリング</p> | <p>10月 デートDV防止教室（1学年）
生徒会リーダー研修（ピア・サポート、ボランティア活動）
子ども理解支援ツール「ほっと」の実施</p> <p>12月 ピア・サポートトレーニング</p> <p>1月 カウンセラーによる人間関係講話</p> <p>2月 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施
「ほっと」分析と活用の教職員研修
グループエンカウンターの実施</p> |
|---|--|

4 取組の内容

- 1 スクールカウンセラーによる教員研修
 - ・スクールカウンセラー来校日にカウンセリングの手法等の研修を実施（毎月1回）
 - ・スクールカウンセラーによる研修資料の配付
- 2 スクールカウンセラーによる 保護者カウンセリング
保護者の希望により、適宜カウンセリングを実施した。
- 3 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施（10月、2月）
- 4 特別支援教育に関する教員及び保護者研修会 7月28日（月）
 - ・サポートセンターこころりんく東川 大友愛美氏による講演会・事例研究会

4 取組の内容

5 生徒会リーダー研修 10月2日(木)、3日(金)

- (1) ピア・サポート研修
- (2) 老人ホームにてボランティア活動の実施
 - ・地域の老人ホームを訪問し、ボランティア活動を通じて、異年齢の方との人間関係づくり手法や奉仕活動の精神を学習し、生徒会活動に還元する方法を検討した。



クラスコーチングの様子

6 性についての講演会 10月28日(火)

- (1) 講師 NPO法人女のスペース・おん
代表理事 山崎 菊乃
- (2) 内容 1年生を対象に、デートDV防止教室を実施し、若者の人間関係の在り方について講師による講演と有志生徒の劇により学習した。

7 人間関係づくりの講話 1月28日(水)

スクールカウンセラーを講師に迎え、2年生を対象に人間関係づくりの講話を実施し、自他への尊重と自己有用感の大切さを学ぶとともに、いじめの未然防止について一人一人が考える機会を設けた。

8 クラスコーチング 2月4日(水)

2年生を対象に、スクールカウンセラーが授業中の生徒の様子を参観し、生徒個々にメッセージを送った。

9 地域の自治活動の運営者との交流

地元の自治活動を実施している団体の方と懇談し、異年齢との交流及び地域に開かれた学校づくりについての研修を実施した。



特別支援教育研修会の様子

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
中途退学者はわずかに減少し、個々の生徒の人間関係づくりの悩みや困難を早期に把握し、兆候のある生徒に対し、即時に対応できるようになった。
- (2) その他の指標による評価
スクールカウンセラーによる人間関係づくりの講話を実施し、お互いの個性や自己有用感の尊重及びいじめの未然防止について考える機会を設けた。スクールカウンセラーと連携した生徒及び保護者のカウンセリングを実施し、生徒の抱える課題の把握と適切なサポートに努め、成果が見られた。
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
 - ・挨拶や感謝など、思いやりの質問項目の数値が高くなった。
 - ・対人関係についての不安や緊張の度合いの項目が高い数値となった。
- (4) 生徒の変容した姿
養護教諭、学年団及びスクールカウンセラーとの連携のもと生徒理解に努める取組により、お互いを尊重する精神や、コミュニケーション能力を身に付け、より良い人間関係を築こうとする姿勢が見られるようになった。

2 課題

- (1) 教育相談等を組織的に対応する校内体制の強化
- (2) 「ほっと」を活用した生徒の把握と活用についての教員の研修機会の設定

3 次年度に向けて

教育活動支援委員会の機能を向上させ、個別の指導計画の作成に努める。

北海道江別高等学校

課程 全日制
 学科 普通科 事務情報科
 生活デザイン科
 生徒数 935名

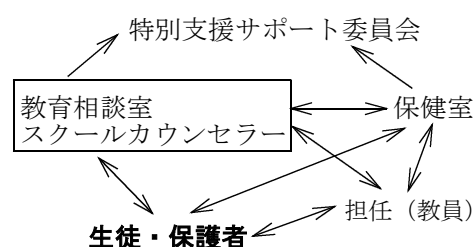
1 取組の特徴

- (1) スクールカウンセラーを活用し、生徒を対象にしたピア・サポート研修等を実施する。
- (2) 教職員の教育相談活動に対する理解促進のために事例研究による校内研修会を実施する。

2 取組のねらい

スクールカウンセラーとの連携のもと、生徒個々の自己開示や他者理解及び人間関係を調整する能力を伸ばし、望ましい学年や学級集団づくりを目指そうとする意欲を育てる。また、教育相談に対する教職員の理解を促進し、カウンセリングマインドを高める。

<組織図>



3 取組の経過

4～5月	学級を中心とした仲間づくり MG検査、心の健康講話(1学年)	11月	スクールカウンセラーによる個別面談 ピア・サポート研修会
6～7月	スクールカウンセラーによる個別面談	12月	教職員対象の校内研修会 ピア・サポート研修会
8月	ピア・サポート研修会(夏季休業)	1月	ピア・サポート研修会(冬季休業)
9月	心の健康講話(2学年) ピア・サポート研修会	2月	スクールカウンセラーによる個別面談及びピア・サポート研修会の実施
10月	「ほっと」の実施(1学年) ピア・サポート研修会	3月	保健局員による研修会の実施 「ほっと」の実施(1学年)

4 取組の内容

(1) ピア・サポート研修会

ア 概況

本校生徒の中には、同級生との対人関係にストレスを感じている生徒が多く見受けられた。そして、対人関係上の悩みを言葉で表現できない生徒の多くは、「周囲から見られている自分」と「自分が感じている自分」との間のギャップや「自分が感じている自分」の表現の方法に悩み、リストカットをしたり、腹痛や頭痛などの身体的不調などがあった。そこで、本校生徒の実態に応じてコミュニケーションスキルを育成し自己有用感を高める活動として、スクール・カウンセラーの指導のもとでピア・サポート研修会を計画し実施した。7月中旬に全校生徒に研修会の開催を案内し、受講希望者を募集したところ、各学年から計15名ほどの参加者があり、第1回の研修会を夏季休業中に開催した。その後、放課後に毎月1回(計8回)のピア・サポート研修を実施した。

4 取組の内容

イ 参加した生徒の様子

ピア・サポート研修会への主な参加理由は、「将来、人と関わる仕事を希望しているため」が最も多く、次いで「人とコミュニケーションをとることが苦手なので学びたい」「自分を理解して自分を変えたいから」というものであった。研修会では、安心感や拒絶感をどのようにして感じるのか言語的・非言語的に理解すること、相手の気持ちを推し量り、どのように関わったらよいのかを体験した。研修会を通して、自分とは異なる感じ方・考え方を理解する機会となり、自己理解・他者理解が深まっている様子がうかがえた。

(2) 心の健康講話

スクールカウンセラーを講師に迎え、1・2年生を対象に「高校生のメンタルヘルス」と題して講話を行った。生徒からは、「身体の疲れやだるさなどは精神的な面からも来ているとわかった」「怒りなどの感情にどう向き合っていたらよいのか考えようと思った」など、思春期における高校生特有の心理的特長や現在の自分の心理状態を振り返るきっかけとなった。



ピア・サポート研修会の様子

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数は昨年度と変わらなかったが、不登校生徒数は減少した。

(2) 子ども理解支援ツール「ほっと」の結果

ア 男子は自己を抑制しつつ、他者の長所を承認し、互いを認め合おうとする力が弱い傾向が見られる。

イ 女子は他者に対する社会的な働きかけの弱さや周囲に気を遣って自分の意見を主張できない傾向が見られる。

(3) 生徒の変容した姿

ピア・サポート研修会に参加した生徒の感想から「“想像する” ことについて、ここまで深く考えたことはなかった」「回を重ねていくうちに“人の気持ちを考える” ということができていく感じがします」など内的な変化の様子が読みとれた。

2 課題

(1) ピア・サポート活動の取組を広げるために参加生徒を増やす必要がある。

(2) 「ほっと」の実施クラスを増やすとともにアセスメント方法を見直す必要がある。

3 次年度に向けて

(1) 養護教諭等と連携し、保健局の活動にピア・サポート活動を実施する。

(2) 1、2学年の全クラスを対象に「ほっと」を実施する。

北海道有朋高等学校

課 程 定時制
 学 科 普通科、事務情報科
 生徒数 388名

1 取組の特徴 ～ 北海道医療大学との連携

- (1) 臨床心理学科の大学生によるピア・サポート及び学習支援
- (2) スクールカウンセラーによるカウンセリング
- (3) スクールソーシャルワーカーによる生徒支援や関係機関との連携

2 取組のねらい

各年次において、中学校時代の不登校経験者がほぼ半数、そのうち3割近くは欠席日数が100日以上あり、中には欠席日数が500日を越える生徒も数名みられる。また、前籍をもつ生徒が約25%おり、過去に多くのトラウマを抱えながら入学してくる生徒が多い。

いじめや学習の遅れなどによる自信喪失のため、授業の参加に意欲を失い、現在もそのことが原因で学校生活に支障をきたしている生徒が多い。そのような生徒にコミュニケーションスキルの向上によって自信を持たせ、より円滑な人間関係を構築できるよう支援する。支援に当たって、平成24年度から北海道医療大学心理科学部臨床心理学科の「臨地実習」に関わる学生の全面的協力を受け、取り組んでいる。

<組織図>

サポート委員会

教頭2名、養護教諭2名、年次主任4名
 生徒指導部長、教務部長、該当担任で構成

サポート委員会支援方法

- ①ガイダンス ②コンサルテーション
 ③コーディネーション ④プロモーション

具体的支援方法

- ①スクールカウンセラー
 ②スクールソーシャルワーカー
 ③ステップアッププログラム
 ④若者サポートステーション
 ⑤特別支援パートナーティーチャー

⇔
 連携
 専門
 機関



校内研修会・職員会議・共通理解 ⇔ 連携 ⇔ 保護者

3 取組の経過

- (1) 平成24年度に特別支援委員会をサポート委員会に再編
 - ・各担任や年次からの要請、保護者等から希望があった場合にサポート委員会で生徒の実態にあった支援方法を検討し、具体的な支援を行う。
 - ア 特別支援教育パートナーティーチャー (札幌稲穂高等支援学校) 学習障がい等が疑われる生徒の支援を相談
 - イ スクールソーシャルワーカー (北海道医療大学臨床心理学科)

- ウ スクールカウンセラー (北海道医療大学臨床心理学科)
- エ ステップアップ・プログラム (北海道医療大学学生の支援と協力)
- エ 札幌若者ステーション

- (2) 平成25年度の取組

大学生によるピア・サポート及び学習支援を実施し、生徒が進路相談をはじめ様々な悩みを相談する姿が見られた。また、ピア・サポート等を通して、大学生との交流を楽しみにする生徒がでてきた。

4 取組の内容

北海道医療大学臨床心理学科の大学生を中心としたピア・サポートと学習支援を行った。

- (1) ピア・サポートと学習支援についてのPRポスターの作成と掲示
 - ・当初、1回2時間、計5回のピア・サポートを設定した。
- (2) 1、2年次の全HRを訪問し、ピア・サポートと学習支援の実施のPR活動
- (3) 10月22日(水)～11月19日(水)の期間に実施
 - ア 時間を大幅に超えて交流する生徒がいた。
 - イ 最終日には、参加した生徒から自発的に大学生たちに手紙等が贈呈された。
- (4) 途中からは、昨年度のピア・サポートに参加した大学生も加わり、大学生の人数が増えたことから、生徒一人一人の要望に応じた個別の対応も可能になった。
- (5) 生徒と学生の双方から、12月以降も本取組の継続について要望があったため、大学側と相談し、2月までさらに6回実施した。
- (6) 参加した生徒の様子
 - ア 生徒は昨年度から継続して参加していることもあり、躊躇することなく、大学生と話ができる状況であり、昨年度の成果として、生徒のコミュニケーション能力が向上していたと考えられる。
 - イ 年齢が近い大学生によるピア・サポート活動等の交流は、生徒にとって相談しやすかったことから、毎週の本活動を楽しみにしていた。
 - ウ 毎回、最後に振り返りの時間を確保し、自分の感想を発表する時間を設けたことから、人前で自分の意見や感想を述べることに抵抗が少なくなった。その結果、学校生活でも、誰とも話すことなく1日を過ごしていた生徒から、挨拶をしたり、笑顔で話をする光景もみられるようになった。

5 次年度に向けて

1 成果

- ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
 - 中途退学者数は昨年比で増加したが、不登校生徒数は昨年度に比べ、かなり減少した。
- イ その他の指標による評価
 - ボランティア活動の参加者は昨年度比累計で減少したが、例年通り活動することができ、地域から感謝され、生徒は充実感や達成感を得ることができた。
- ウ 生徒の変容した姿
 - 自分から出会いの場やコミュニケーションを求めて動こうとする姿勢や気持ちを少しでも持っている生徒に対して、本取組は大変有効であった。参加人数は最大で15人余りと大きく増えるまでには至らなかったが、比較的年齢が近い大学生に、大学生活等について進路相談をしたり、また、一緒にゲームをしたり試験前には学習支援を受けたりしながら楽しい時間を過ごすうちに、参加生徒も積極的に挨拶をしたり、笑顔が見られるようになった。

2 課題

- 本校入学をきっかけに登校できるようになった不登校経験のある生徒には、支援の手を差し伸べることができるが、学校に登校できていない生徒に対してどのように支援をしていくかが課題である。
- 問題を抱えたり、不登校傾向のある生徒の保護者から、スクールカウンセラーへの相談が多かったが、十分な時間の確保をすることができなかつたことが課題である。
- 今後とも、スクールカウンセラーとの連携を強めて、生徒が少しでも登校できるような環境づくりを進めていきたい。

3 次年度に向けて

- 次年度も大学生の支援によるピア・サポートの継続を大学側と確認しており、今年度の成果を積み上げて、より一層、内容の充実を図りながら進めていきたい。

北海道札幌北高等学校

課 程 定 時 制
 学 科 普 通 科
 生徒数 248名

1 取組の特徴

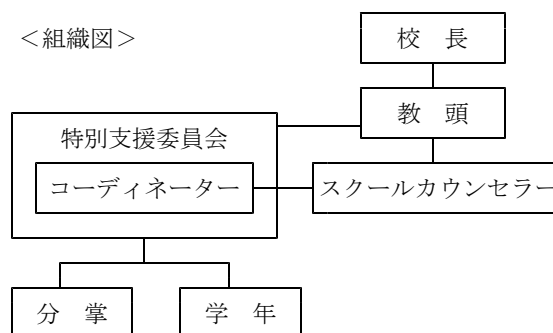
「人間関係づくりやコミュニケーションスキルの育成を図る」ことを目的とし、次の事項を重点的に取り組む。

- (1) スクールカウンセラーを活用したメンタルヘルスに関する取組
- (2) スクールカウンセラーを活用したコミュニケーション能力の育成を図る取組

2 取組のねらい

中学校時代に不登校のため基礎的な学力が身に付いていない生徒、中途退学する生徒及び教育上特別な支援を必要としている生徒など様々な生徒が在籍していることから、生徒の自立を促すために、生徒個々に応じたきめの細かい支援とケアが求められており、カウンセリングを通して生徒のコミュニケーション能力の向上を図る。

<組織図>



3 取組の経過

- 5月 メンタルヘルス講話
 ・対 象 第1学年
 ・テーマ ストレスチェック
 ・講 師 スクールカウンセラー
 山本 創 氏
- 5月 校内研修会Ⅰ
 ・内 容 発達障害がある生徒への支援
 ・講 師 就業生活相談室からびな室長
 上村 差知 氏
- 7月 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施後、分析結果を教職員で共有
- 12月 校内研修会Ⅱ
 ・テーマ 予防教育としての
 ストレスマネジメント
 ・講 師 北海道教育大学釧路校准教授
 安川 偵亮 氏

- 2月 メンタルヘルス講話
 ・対 象 第1学年
 ・テーマ こころの病は予防できる
 ・講 師 北海道医療大学教授
 富家 直明 氏
- 2月 子ども理解支援ツール「ほっと」の実施後、分析結果を教職員で共有
- 3月 校内研修会Ⅲ
 ・テーマ ケース会議
 ・講 師 スクールカウンセラー
 山本 創 氏

4 取組の内容

1 メンタルヘルス講話

(1) 5月実施

1年生を対象に、本校のスクールカウンセラーからカウンセリングについての講話を受けた後、メンタルヘルストレーニング（ストレスチェック）を実施した。

(2) 2月実施

1年生を対象に、講師が学年担任とコミュニケーションを図りながら説明したり、生徒を指名してコミュニケーションをとりながら、こころの健康を得るための具体的な「考え方」と「行動様式」についてアドバイスを受けた。

2 校内研修

本校のスクールカウンセラーを講師に迎え、「ストレスマネジメント」について講話を聞いた後、「筋弛緩法」などによるリラックスするための実技を行った。また、事例研修も行い、生徒の心の健康のためには教職員が健康であることが大切であると改めて感じた。



5 次年度に向けて

1 成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者は、全体的に前年度から減少した。特に1、2学年での退学者の減少が顕著である。不登校生徒数はどの学年も大きく減少した。

○中途退学者数

	1年	2年	3年	4年	合計
平成25年度	22人	11人	3人	1人	37人
平成26年度	10人	1人	3人	1人	15人

○不登校生徒数

	1年	2年	3年	4年	合計
平成25年度	20人	7人	5人	0人	32人
平成26年度	3人	3人	2人	0人	8人

(2) 1学年における子ども理解支援ツール「ほっと」の結果

ア 要素別では拒否・忠告・率先について女子の数値が低かった。

イ 4因子ではどの項目においても男子に比べ女子の数値が低かった。

ウ いずれもクラス間による差が大きかった。

(3) 生徒の変容した姿

昨年に引き続き学校生活が非常に落ち着いている。授業への積極的な取組が見られ、全校集会時の整列・聴取態度は素晴らしい。特別生徒指導件数が大きく減少している。

2 課題

(1) コミュニケーション能力の向上と社会性を身に付けさせること。

(2) 個別指導による特別支援教育の理解と充実を図ること。

3 次年度に向けて

(1) スクールカウンセラーの計画的で効果的な活用に努める。

(2) 校内研修の充実を図るとともに校外研修への積極的参加を促し、特別支援教育の理解とスキルを向上させる。

北海道余市紅志高等学校

課 程 全 日 制
 学 科 総合学科
 生徒数 163名

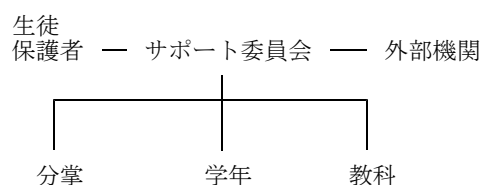
1 取組の特徴

平成22年度に管内唯一の総合学科として開校し、1年次生に必修科目「産業社会と人間」を学習させている。この科目の単元目標に、「キャリア教育の充実」と「コミュニケーションスキルの育成」を設定し、生徒のキャリア発達の向上を図った。1年次生の総合的な学習の時間に、コミュニケーション能力育成のトレーニングを計画的に入れている。

2 取組のねらい

人間関係を上手に構築できないことにより不安定な心理状態となり、高校生活を有意義に送ることができない生徒に対して、授業や地域との交流、ボランティア活動等を通じてコミュニケーション能力を向上させることを目的として、取り組んでいる。

<組織図>



3 取組の経過

4月	宿泊研修「構成的グループエンカウンター」 通学路清掃 コミュニケーショントレーニング「自己理解・他者理解」	「ほっと」の実施 スクールカウンセラーによる支援が必要な生徒に対する面談 学校祭
5月	担任面談	8～12月 進路学習を通しての自己理解・他者理解
6月	コミュニケーショントレーニング「アサーション」「ピア・サポート」「アンガー・マネジメント」 余市養護学校での花壇作りと運動会ボランティア	9月 障がい者施設との交流会 体育祭
7月	高齢者施設との交流会と幼稚園の花壇整備	11月 余市養護学校との交流会 12月 総合学科発表会 球技大会 余市養護学校との交流会 「ほっと」の実施

4 取組の内容

(1) コミュニケーショントレーニング

ア ねらい

エンカウンターやワークショップ、ワークシート作成など、各種アクティビティを通じて自己理解・他者理解を深め、円滑なコミュニケーションやアサーションについての意識を高める。

イ 対象 1年次

ウ 内容と日時

- ・ 4月16日～18日 宿泊研修にて「グループエンカウンター」の実施

- ・ 4月23日 コミュニケーショントレーニング①
「自己理解・他者理解」
ワークショップで自己表現を行いながら、自分を理解する。クラスメイトにインタビューして互いを知り、相手の気持ちを考える姿勢を身につける。
- ・ 6月11日 コミュニケーショントレーニング②
「アンガーマネジメント」
グループワーク「怒りについて考えよう」を通じて、他者尊重の意識を高める。
- ・ コミュニケーショントレーニング③
「アサーション」
- ・ 6月18日 コミュニケーショントレーニング④
「ピア・サポート」



エ 成果と課題

年度当初からの計画的なコミュニケーショントレーニングを通して、生徒の人間関係能力やコミュニケーション能力を育成することができた。1年次生の保健室利用者は年度当初は中学時からの怠学傾向を引きずっての利用が目立ったが、人間関係のトラブルでの利用は例年になく少なかった。

入学後すぐ不登校になってしまう生徒に対しては取組自体ができない。義務教育段階からのコミュニケーション能力育成のために中学校と連携することが必要である。

(2) ボランティア

ア ねらい

生徒会やボランティア事務局と連携して全校的にボランティア活動に取り組むことで、共同の意識や奉仕の精神を養う。

イ 対象 全年次

ウ 内容と日時

- ・ 4月26日 春の通学路清掃
- ・ 6月22日 町のボランティア講習会に参加
- ・ 6月25日 余市養護学校の花壇整備
- ・ 7月5日 ぼれぼれペンギンクラブと余市ソーラン祭りのパレード参加
- ・ 9月20日 余市幸住学園「幸住ふれあい祭」の補助
- ・ 9月27日 余市豊浜学園「秋祭り」の補助
- ・ 12月21日 障害のある子と遊ぶ「ムーブメント体験」補助



エ 成果と課題

ボランティア活動の回数を重ねるごとに参加者の人数が増えている。生徒たちは、年次を越えて人間関係が深まったり、幼稚園からお年寄りまで幅広い年齢の方とのふれあいを体験することで、ボランティア活動に喜びや感動を感じている。

ボランティア事務局が主体となつての活動なので、少しずつ参加人数が増えているとはいってもまだ限定的な参加に留まっている。分掌や学年、生徒会との連携を強化し、全校的な取組に広げていくとともに、コミュニケーション学習とのつながりをもたせることでより多くの生徒が自己有用感をもてるようになることが期待できる。

(3) 子ども理解支援ツール「ほっと」の状況

ア ねらい

「ほっと」を年2回実施することで、様々な活動の事前と事後でのクラス集団の傾向を把握するとともに、取組の検証材料とし、課題解決に役立てる。

イ 対象

1年次生

ウ 内容と日時

1回目：7月24日実施　　2回目：12月22日実施

エ 成果と課題

13要素別の得点では、「自律」と「学業」の得点が向上しており、生徒は、自分自身の感情や行動をコントロールしたり、学習場面で分からないところを、自ら進んで友人や先生に質問して解決したりする姿勢が備わってきている。

しかし、「因子得点」の経時変化を見ると「仲間強化因子」の得点が低下していることから、クラス内でのグループが形成されてきたことにより、主体的にコミュニケーションをとっている生徒とそうでない生徒に二極化している傾向が読み取れる。集団に対する慣れから、他者への配慮が入学当初に比べて薄らいできたと言えるため、前期に集中して行っているコミュニケーショントレーニングを後期にも適宜実施していくことにより、多様な人間関係を形成していく必要がある。

5 次年度に向けて

(1) 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数及び不登校生徒数は昨年度との大きな違いはない。不登校生徒のほとんどが中学校から不登校傾向であり、コミュニケーショントレーニングに参加することができなかった。コミュニケーショントレーニングに参加した生徒たちは、出身中学も普段過ごしているグループも違う生徒同士でペアワークやグループワークをすることで、クラスメイトの意外な一面や好ましい部分を見つけることができ、人間関係が広がる楽しさを味わう姿が見られた。

イ その他の指標による評価

保健室利用者は昨年と比べると減少している。昨年度は1年次生の利用が特に多かったことと、2・3年次生の相談件数が増えたことが利用増の要因としてあったが、今年度は、学校生活への適応に伴う1年次生の来室の急激な減少と、2・3年次生の相談件数の減少が、全体の来室数に反映した。2・3年次生はコミュニケーションスキルを高めるための工夫が授業の中で積み上げられてきており、仲間同士で問題を解決する力がついてきていることが、相談数の減少につながったと見ることができる。

ウ 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「ほっと」を活用した把握概況は上記4の(3)エの通りである。クラス全体の概況を把握するには大変効果的であったが、個々の状況を把握するためには、「アセス」等と併用していくことがより効果的であると思われる。

エ 生徒の変容した姿

1年次生は入学当初から人間関係における大きなトラブルはほとんど見られなかったが、活動を通して身近な人以外とも積極的に関わろうとする雰囲気も生まれていた。しかし、積極的な姿勢を維持したり自身を律し続ける緊張感が後半になるに従って緩み、固定化した人間関係の中で満足する姿が多く目につくようになってきている。

(2) 課題

ア 今年度は「ほっと」のみの実施としたため、クラスや年次全体の傾向把握には役だったが、個々の生徒理解に関しては、「アセス」との併用が望ましい。

イ 人間関係を広げる努力を続けることや、他者との関係の中で常に自分自身を高めようとする緊張感を持続させることは大変なことである。コミュニケーションスキルトレーニングを前期に集中して実施しているが、後期にも緊張緩和のためのエンカウンターを取り入れるなどして、生徒が新しい関係づくりに挑戦していくことを支援し続ける必要がある。

(3) 次年度に向けて

ア 次年度は「ほっと」と「アセス」を併用することでより、多角的な生徒理解、集団理解につなげていく。

イ 後期にもコミュニケーションスキルトレーニングに取り組む時間を計画していく。